

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：13101
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2018～2022
 課題番号：18K02698
 研究課題名（和文）グローバル人材育成に向けた協働型国際交流プログラムの成果検証と評価方法の再検討

研究課題名（英文）Verification of results of collaborative international exchange programs for global human resource development and review of evaluation methods

研究代表者
 相庭 和彦（AIBA, KAZUHIKO）
 新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：00222464
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：第1に国際交流事業に参加する学生に訪問国の事前情報と国際関係を学習しておくことで訪問の効果が高い。第2に国際交流に参加した学生は就職先をグローバル企業にすること多く、そこで活躍している人材が多い傾向がある。第3に国際交流事業では大学同士が交流するだけでなく、同一学部同士あるいは同一大学院研究科同士の交流が有効である。最後に国際交流事業は単年度事業ではなく、継続的に行われる事業であること、事業が交換留学制度や付属学校の交流活動と結びついてその効果が発揮されることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高等教育におけるグローバル化推進のための国際交流活動において、そのプログラムにおいて事前学習の重要性が確認された。また継続性の重要性およびその波及効果が確認された。特に学部中心の交流であったが、付属学校の教員・児童生徒の参加まで広がりを持った。

教育交流を中心としたプログラムは教職大学院への波及効果が大きく、小学校・中学校の教育実践活動でのグローバル人材育成のための教育活動の質的向上の成果があった。リモートを活用したフォーラムを通じての成果の確認が、国際交流事業が大学内だけでなく、多くの参加者を通して行われたことが最も高い社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：First, it is more effective if students participating in international exchange programs learn about the countries they visit in advance and international relations. Second, students who participate in international exchange tend to work for global companies, and many of them are active there. Third, in international exchange projects, it is effective not only for universities to interact with each other, but also for exchanges between the same faculties and graduate schools. Finally, it became clear that international exchange programs are not one-year projects, but are carried out continuously, and that their effects are exerted when the projects are linked to the exchange program and the exchange activities of affiliated schools.

研究分野：生涯学習・社会教育

キーワード：グローバル教育実践 交換留学 グローバリゼーション 交流事業 国際事業の継続

1. 研究開始当初の背景

新潟大学教育学部学習社会ネットワーク課程では、2000年以来、2018年までの18年間(2003年はSARSにより中止)中国北京師範大学珠海校と交流を続けてきた。交流内容は交換留学と双方の教員の訪問授業、および双方の付属学校訪問し、お互いの文化を小・中学生に紹介するというプログラムである。このプログラムに参加した学生は毎年15名を数え、18年間を通して120名を超えていた。この交流プログラムは終了時に必ず報告書にまとめられているため、この報告書は具体的にどのような成果が出て、また今後どのような交流活動が必要なのかを深めていくことを検討するためには十分な資料であった。

また参加学生が卒業後国際関係にいかなる関心を示しているのかを明らかにしていくことが、高等教育の国際化を見通していくうえで重要な視点であることが本研究開始当初の背景としてある。高等教育の国際化を展望するうえで一般的にはまず語学的重要性があげられるが、この交流は少し異なっている点が特色であった。そもそも学生の多くが他国への関心よりは自国への関心が高く、それゆえに自国の特色が見えにくくなっていることを踏まえ、文化交流を中心として最初意思疎通は北京師範大学の院生に任せた。帰国後、中国社会の認識に変化が起こり、留学する学生が増えていった。その留学生たちが交流事業の通訳を役割を果たしていった。このことから具体的に交流事業がその効果を発揮するとはどのような形があるのか。この交流活動は一つのモデルとして整理することが今後の高等教育の国際交流事業の在り方に一つの可能性を与えるのではないかとの問題意識のもと研究は開始された。

2. 研究の目的

1) グローバル化が進化した現代社会で対応した人材育成に、大学教育は以下に対応するべきかという課題に具体的・実践的にアプローチするものである。特に新潟大学で継続的に実施されてきた国際交流事業における参加学生の交流体験 参加学生への短期的・中期的影響に質的検討を行い、モデルプログラム開発への示唆と提起を行うものである。

2) グローバル事業の参加を前提とした場合、事前の学習としてグローバル化についての基礎的理解が必要であるが、それはどのようなもの特色を有するものであるかを論理・実践的に検証する。

3) 高等教育における国際交流とはどのようなものなのかを実践的に探究し、その特徴を捉え、評価方法を検討する。

4) 効果的持続的な国際交流事業の在り方を実践的に探究し、新たな形を提案する。

3. 研究の方法

1) 国際交流活動に参加した学生たちのネットワーク化を図り、参加者から現代の活動状況と学生時代に参加した国際交流事業の影響を語りあえる環境を構築する。

2) 18年間の国際交流事業報告書の内容 特に参加感想の部分を読みこみ、この事業の特徴を学生の振り返りからとらえる。

3) 国際交流事業の相手方である中国人留学生と新潟大学学生とのネットワークを構築し、国際交流事業を振り返り、これがどのようなものであったかを国際教育フォーラムという形で意見交換会を開催する。

4) 国際交流事業の波及効果として新潟大学付属学校と北京師範大学付属学校の交流教育実践を位置付ける

5) 学部だけでなく16年度から展開されている教職大学院における国際交流事業についてその教育効果を参加者に実践研究への影響を本人が国際教育フォーラムで報告することで明らかにしていく。

4. 研究成果

19年間継続した交流事業の特色を明らかにした。

2001年から2019年の交流事業について、3段階に特徴をまとめられる。初期は、お互いに訪問し、教育関係視察と交流により見識を高める段階であった。学生交流のために日本紹介する内容をまとめる活動を学生は行っていた。2007年ころより発展期となり、交換留学が始まることによって、留学生を中心にお互いの国で学生が交流を深めつつ、相互訪問の際にこの留学生たちが通訳として活躍し、さらには教員による講義、それに加えて国際フォーラムも開催した。また、学生交流での互いの国の紹介だけでなく、日本人学生による中国の小学校での授業も展開されていった。この間、2月に中国大学教員による新潟大学での集中

講義、3月ないし6月に新潟大学教員による中国の大学での集中講義も積み重ねられていったし、この講義で資料を翻訳し通訳する交換留学生の姿は、他の学生にとってたいへん憧れの状況であった。充実完成期は2016年に新潟大学教職大学院が発足したことによる。中国の大学での院生同士の研究発表交流、そして中国の小学校での日本人現職教員院生による授業と中国の教員による授業を並行して行い、双方の授業検討会が常時もたれるようになった。新潟大学附属学校と中国の附属学校の交流も日常化した。これらの蓄積により、2020年以降はCOVID-19の世界的流行により相互訪問ができなくなっている間も、附属学校間の教育交流、教員によるWEBでのフォーラムは継続できている。

参加者満足度

在学中に留学を経験した修了生17名(平均留学期間10ヶ月)と留学経験はないが短期の訪中経験を有する修了生4名を対象に調査したところ、現状への満足度(4段階評定)については、「現在の仕事に満足している(2.71, 2.25)」「現在の収入に満足している(2.41, 2.50)」「仕事以外のプライベートな生活に満足している(3.41, 2.75)」「交友関係に満足している(3.34, 2.75)」「人生に満足している(3.29, 2.50)」(括弧内の値は、留学経験者、未経験者)であり、全体として留学経験者の満足度が高いことが示された。収入への満足度はあまり相違がないが、プライベートや交友関係への満足度で相違が大きい。さらに留学経験者は、訪中経験者よりも、その経験がその後のキャリア形成に役立つと認識する傾向が全般に高く、特に採用時の評価(特に語学力や留学経験自体が高く評価される)や仕事でのスキル使用で相違が大きかった。収入を高めるのに役立つかどうかについては、留学経験者と訪中経験者との相違は比較的小さかった。

交流事業に参加していく学生の国際認識に対する支援

国際交流活動は参加する学生に交流内容を理解させ、活動内容に対する十全の準備をさせていくと成果が高いことが国際教育フォーラムでの参加経験者からの発言から明らかになった。国際交流事業の特色でも明らかにしたが、北京師範大学学生と新潟大学学生が各々の国の文化と伝統を発表し合い、討論をして理解を深めること、また付属学校を訪問し子供たちに日本の文化や子供の様子を伝えることを柱とした活動であった。そのために参加学生たちは広い年齢層の人々と交流をすることができ、中国という他国の文化がどのように形成されるかを肌で感じることもできた。これは事業の参加の事前学習抜きにはほぼ不可能であり、19年間の訪問記録からも読み取ることができる。

教職大学院生の交流事業への参加と効果

学部生の交流事業に加え、教職大学院生の交流事業への参加についてその特色と効果が明らかになった。教育実践研究の交流が主な内容で、付属実験学校でも授業展開とその後の授業研究会主な交流であった。明らかに職業人としての交流は文化的違いよりは職業的同質性を重点とした交流になるため、参加後の教職大学院院生(特に現職)の意識の変容は帰国後の提出記録から読み取れることができた。また2018年、2019年の交流事業を踏まえて2020年度総括的な交流事業形態の提案を準備したのであるが、コロナウィルス感染症の流行により新たな交流事業は展開できなかった。

教育フォーラムの成果

2020年の交流事業がコロナウィルス感染症の流行により中止・延期したために2021年及び2022年度はICT活用によるハイブリット型のフォーラムを開催した。コロナ禍での交流は過去交流経験のある院生・卒業生は積極的に参加でき、各々の国の教育がどのような状況にあるのかを提案して、情報を共有し、直面する問題を話し合った。20年間の交流の積み上げは、「実際の対面交流」でなくても十分な成果を生むことが明らかとなった。このことから国際交流活動は、継続すること及び卒業後も参加者のネットワークを維持しつづけることが重要である点が明らかになった。コロナ禍でリモートで国際交流を経験すると、リモート交流は効率的ではあるが、その事業を展開する前提として、お互いの信頼関係がないと交流は成功しない。国境を越えての交流は様々な実際対面で行われ、それと並行してリモート型の交流を組み合わせることが有効であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 相庭和彦 宮園衛	4. 巻 13巻2号
2. 論文標題 グローバルゼイションと教育 –グローバルゼイションという現象を教育実践化するために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 191～209頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮園衛 田中一裕 雲尾周 相庭和彦	4. 巻 14巻2号
2. 論文標題 グローバルゼイションと教育 –グローバルな課題に向き合う見方・考え方、資質・能力の育成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 247～270頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 相庭和彦	4. 巻 12号
2. 論文標題 アジアのグローバル下における「矛盾と葛藤の」教育改革 - 教育再生会議・教育再生実行会議の「提言」に関する考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 公教育計画研究	6. 最初と最後の頁 68～87頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相庭和彦 宮園衛	4. 巻 13巻2号
2. 論文標題 グローバルゼイションと教育 –グローバルゼイションという現象を教育実践化するために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 191～209頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相庭和彦 岡田崇宏 鈴木正美 鈴木亜美 野崎良平	4. 巻 第3号
2. 論文標題 中国視察報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新潟大学教職大学院年報	6. 最初と最後の頁 65～73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	雲尾 周 (kumoo shu) (30282974)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	
研究分担者	杉澤 武俊 (sugisawa taketoshi) (30361603)	早稲田大学・人間科学学術院・准教授 (32689)	
研究分担者	中島 伸子 (nakashima nobuko) (40293188)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計11件

国際研究集会 日中国際交流フォーラム2021--グローバル人材育成に向けた協働型国際交流プログラムの成果検証と評価方法の再検討-	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 日中教育実践交流検討会	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 新潟大学と北京師範大学の大学間交流について	開催年 2020年～2020年

国際研究集会 北京師範大学付属南澳実験学校と新潟大学教職大学院教育実践研究交流会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 日中教育フォーラム－珠海－	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 日本社会科教育学会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 新潟大学・北京師範大学学生研究交流会	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 新潟大学・北京師範大学惠州実験学校授業研究集会	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 日本教育講演集会（北京師範大学珠海校）	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 北京師範大学南澳実験学校教育研究集会	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 国際教育フォーラムIN新潟	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			